

国産ウルシの増産と林福連携

青森県立五所川原農林高等学校 森林科学科2年 ○新木俊ノ介
○櫛引 悠惟
○能登谷倅明

1 はじめに

2. 先輩！森林科学科



私達は、東北地方で最後となる林業を学んでいる森林科学科の生徒で、令和9年には閉科になります。これまで、森林科学科の先輩達は、たくさんの植栽活動などを通して、青森県の林業を盛り上げてくれました。来年は私達が先輩達の意味を引き継いでさらに盛り上げたいと思います。再来年は環境科学科

の森林コースの後輩達が私達以上に盛り上げてくれるはずです。

8. 弘前大学ウェルビーイング研究センター



私達は、今年から課題研究の授業で、「国産ウルシの増産と林福連携」をテーマに、ウルシの研究に取り組むことにしました。この研究は、今年の春から弘前大学教育学部次世代ウェルビーイング研究センターの高大連携事業となったのです。ウェルビーイングとは、身体的、精神的、社会的に良好で満たされた状態を意

味しおり、単なる健康や一時的な幸福感だけでなく、持続的な「よい状態」のことを言います。私達は、弘前大学人文社会学部と柏木農業高校と共同で取り組むことになりました。

2 取組

11. 連携事業(1) 播種



4月は、ウルシの播種を柏木農業高校で実施しました。森林施業プランナーである株式会社ミミズくさんとB型就労支援施設である株式会社きりんの里の利用者さんから教えてもらいながら実習をしました。ウルシの種子は昨年採取したもので、塩水選で選別して脱穀したものを水に浸して軟らかくします。

発芽を促すために、種子の端を爪切りで切る細かい作業をします。その種子をトレイに播種して覆土します。その後、覆土や種子が飛ばされないように霧吹きで慎重に灌水するなどの神経を使う作業が続きました。

15. 連携事業(2) 植栽



地拵え → 植栽

5月は、弘前市相馬地区にウルシの苗を植栽しました。地拵えや苗の植え方にいたるまでミミずくさんやきりんの里の利用者さんから教えていただきました。地拵えは植栽する場所を耕すことで、伐採跡には枝や切り株など撤去しなければならないものが多く、とても大変でした。施設の利用者さん達は、日頃から、ウルシ栽培に関わっていることから、とても手際よく、私達にも分かりやすく教えてくれました。また、利用者さんをはじめ弘前大学の学生さんや柏木農業高校の生徒さんとも楽しく活動することができ、交流を深めることができました。

19. 連携事業(3) 下刈り



とっても大変でした！

7月は、ウルシを植栽した場所の下刈りです。木の成長よりも雑草の成長が早いことから、年に2、3度下刈りをしないと、木が雑草に負けて成長が阻害されてしまいます。中には、枯死してしまう場合もあることから、この作業はとても重要です。夏の暑い中での実習はとても過酷でしたが、終わった後の達成感は最高です。

21. 弘前大学ウェルビーイング研究センター



激励やアドバイス！

8月には、弘前大学教育学部附属次世代ウェルビーイング研究センターのセミナーに参加し、これまでの研究内容を発表してきました。たくさんの方から激励やアドバイスをいただき、研究意欲がさらに高まりました。

22. 連携事業(4) 種子採取



今年の種子は不作！

10月14日にミミずくさんと放置林再生などの活動をしているReNeW津軽さんと一緒に、来年の種まき用のウルシの種子を大鰐町で採集してきました。今年は木の実が大凶作で、ウルシの種子はほんの少ししかありませんでしたが、高枝切りはさみでブドウの房のようになっている種子を丁寧に切り落としてきました。

24. 見学(1) 株式会社小西美術工藝社



10月17日には岩手県二戸市にある株式会社小西美術工藝社を訪問し、福田社長さんからウルシについてお話を伺ってきました。小西美術工藝社は日光東照宮などの日本中の神社仏閣を修復する仕事をしています。今では、ウルシの生産や樹液を採取するカキコと呼ばれる職人さんの育成にも力を入れている

ます。二戸市は国産ウルシの約75%を生産している国内最大の生産地です。しかし、この生産量を含めた国産ウルシは、日本の使用量の6%にあたる2tしかなく、ウルシのほとんどは中国の輸入に依存していました。平成27年に文化庁は、国宝や重要文化財建造物の保存修理には、原則として国産ウルシを使用するように通知しましたが、圧倒的な生産量不足が大きな課題となっています。

29. 調査(2) 三内丸山遺跡



また、私達が住んでいる津軽地方では津軽塗が有名で、2017年には青森県で初の重要無形文化財に指定されました。ウルシは山菜のように特用林産物であるため、農地転用をせずに栽培管理ができます。また、休耕地を利用しているため、林地より幹線道路が近いことから、管理作業がしやすいなどの利点などがあります。

ウルシについて調べてみると、ウルシは落葉広葉樹で、日本では約9,000年前から、食器や工芸品などの塗料や接着剤として利用されてきました。青森市にある世界文化遺産に登録されている三内丸山遺跡からは、縄文時代のウルシの種子や漆器が出土していることから、青森県とも深い関わりがあります。

32. 見学(2)



11月には、岩手大学農学部でウルシの研究をされている白旗先生を訪ねて、ウルシの講義をお聞きした後、ウルシ栽培の圃場を見学させていただきました。先生は、ウルシの灌水や冬越しの仕方、栽培管理までを、とても分かりやすく教えてください、とても学校の授業とは違う意味でとてもいい勉強になりました。

34. ウルシの発芽試験



ことが要因であると考えられます。しかし、ウルシの苗は水分不足と暑さに弱いことから、私達の栽培管理が未熟だったために、今では70本にまで減少してしまいました。私達は、白旗先生から教えていただいた冬越しの仕方を試験しました。屋外では、苗を雪害から守るために、横に倒したままにする方法と苗を密集させてバーミキュライトで保温する方法の2つの試験区を設定し、屋内では、無加温で定期的に灌水しながらの試験区を設定しました。来年度の成長が今からとても楽しみです。

4月に柏木農業高校で播種した140粒のウルシの種子から123粒が発芽しました。ウルシの平均発芽率が10%であることを考えると、約90%という高い発芽率を得ることができたのです。これは、昨年のウルシの種子は大豊作で、種子の状態がどれも大粒だったことと、脱蠟処理がしっかりと行われた

40. 講演会 農福連携



私達は昨年、弘前市で農福連携に取り組んでいるリンゴ生産者の福眞さんと鳴海さんからお話を聞く機会を得ました。福眞さんは人手不足解消を目的に、鳴海さんは経営改善を目的に、障害者を受け入れていました。一方、きりんの里の事務局長さんに、ウルシ栽培を始めた理由を聞いてみたところ、「就労支援施設にはA型とB型があるが、B型賃金はA型の半分以下なので、ウルシで得た利益を利用者さんに還元したい。」とのことでした。私達も県のホームページで調べた結果、A型の平均賃金が月に7万6千400円に対し、B型は2万979円とまさに半分以下でした。

3 まとめ

46. 国産ウルシ



- 4) 植栽後15年で樹液を採取して販売でき、木材生産に比べて現金化が早い。
- 5) 植栽したウルシが全て順調に育ったとすると、240kgのウルシが生産され、1kg6万円で取引されていることから、約1,500万円の売上げが見込まれる。
- 6) 林福連携により、雇用の創出と確保ができる。などがあげられます。

4 考察

47. 林福連携



生産者側も雇用の確保や生産力の向上にもつながります。まさに、人も社会も良い状態になるという「ウェルビーイング」なのです。

この研究を通して、地域資源である津軽ウルシの生産と福祉が連携すれば、地域の振興を図るとともに、22世紀に向けた新たな「あおもりを創造」する第一歩になると確信しました。最初、林業と福祉がどう結びつくのか全く分からないまま研究をしてきましたが、林業が障害者の就労や生きがいづくりになり、

以上、研究をまとめてみます。

- 1) 国産ウルシの生産量は年間使用量の6%しかなく、文化庁の目標を達成していない。
- 2) 樹木の種子は、豊作と凶作の年があることから、安定したウルシ生産をするためには、種子を保存する必要がある。
- 3) ウルシは発芽率が低く、栽培管理も難しい。

この研究を通して、地域資源である津軽ウルシの生産と福祉が連携すれば、地域の振興を図るとともに、22世紀に向けた新たな「あおもりを創造」する第一歩になると確信しました。最初、林業と福祉がどう結びつくのか全く分からないまま研究をしてきましたが、林業が障害者の就労や生きがいづくりになり、